

# 國語普及の一方策

## 一 教育部管轄「國語講習所」の場合

藤田 一 乘

雑誌《新青年》に「文學改良芻議」が発表されて以後、白話と文言、或は共通語の制定についての議論が噴出した。近代化に出遅れた中華民國が、それを成功させるには、文學、延いては文字の解放が急務であったからだ。そこで当時の知識人は、挙つてこの問題を取り上げたが、政府の対応は如何なるものであったのか。この論文では、教育部管轄の國語講習所について論じていく。

### 一. 國語講習所の設立理由

1920年1月12日に教育部から「教育部訓令第一二號」が発せられた。それは、

安據全國教育會聯合會呈送該會議決推行國語以期言文一致案，請予採擇施行；又據國語統一籌備會函請將小學國文科改授國語，迅予議行各等因到部。查吾國以文言紛岐，影響所及，學校教育固感受進歩遲滯之苦痛，即人事社會亦欠具統一精神之利器。若不急使言文一致，慾圖文化之發展，其道無由。本部年來對於籌備統一國語一事，既積極進行，現在全國教育界輿論趨向，又咸以國民學校國文科宜改授國語爲言；體察情形，提倡國語教育實難再緩。茲定自本年秋季起，凡國民學校一二年級，先改國文爲語體文，以期收言文一致之效。合亟令行該廳局校轉所屬各校小學遵照辦理可也。

1920年の秋から言文一致の実現の爲に國文科を國語科に変えるという通達である。この通達は〈這一道命令把中國教育的革新至少提早了二十年〉（「國語講習所同學錄」1921年《教育報》）と、後に胡適も高く評価したものであり、政府の言文一致政策の嚆矢であった。

しかし國語を教えるといつても簡単ではない。特に問題となつたのは発音である。

この発音の問題は1913年成立の讀音統一會や1919年成立の國語統一籌備會でも何れの地方の音、聲調を標準とするかがそれぞれ問題となつた。その結果として、一応注音字母や『國音字典』に結実したが、明確な発音の規定が欠けていた。そして所謂“國京問題”<sup>(1)</sup>が起こるのであるが、

現実の教育現場では1920年の秋から國語を教えないといけなくなった。

國語はもちろん音だけでなく、語彙、文法等、さまざまな事柄で構成されているが、しかしその中でもやはりこの音が問題となった事は想像に難くない。語彙は地方で若干の相違はあったであろうが、基本的には同じであり、文法も中國語である以上、どの地方でも基本的には同じであった。ただ西洋の言語學の影響が中國にも押し寄せて、文法を正しく理解し、教える爲の訓練は必要であった

では教育部は音をどのように認識していたか。

教育部は1919年9月、『國音字典』が出版されるにあたり、出した訓令を見てみよう。そこには、

北京音在國音中適占極重要之位置；國音字典中所注之音，什九以上與北京音不期而暗合者，即以此故。<sup>(2)</sup>

とあり、教育部は國音の大部分が北京音で構成されているとの認識であった。

しかし北京音で話し、豊富な語彙を持って、しかも正しい文法の知識を有した人間が、1920年にどれ程いたのであろうか。ほとんどいなかったと言っても過言ではないであろう。國語の教師を全國の小學校に洩れなく派遣することなど不可能であった。そこでこの教師の育成が早急に解決すべき問題となった。その解決方法の一つが國語講習所の設立であった。

## 二. 國語講習所の設立時期と受講者

國語講習所は全部で四回開かれている。黎錦熙<sup>(3)</sup>『國語運動史綱』に拠ると、

第一次(民九一一九二〇)各省區教育廳選送學員；

第二次(民九一一九二〇)各省區師範學校選送學員：兩次畢業共計二百八十五人。

第三次(民十一一一九二二)各省區大學或高師畢業或現任教員，畢業一百零一人。

第四次(民十一一一九二二)考取學員畢業五十四人。

開校日は第一回、二回は1920年、第三回は1922年、第四回は1922年とあるが、第三回は、『教育雜誌』では、すべて1921年とあり<sup>(4)</sup>、誤植か黎錦熙の誤解であろう。

では國語講習所はどのような組織であったのかを以下で見てみる。  
國語講習所の構成人員は、1920年教育部批第一六五號の「國語講習所章程」では、

第一條 本所隸教育部以養成國語教員爲宗旨。

第二條 本所設所長一人副所長一人執行本所事務。

第三條 本所設事務員三人書記四人司庶務會計教務文牘及繕寫等事  
所長副所長及事務員均由教育總長指派之。

第四條 本所教員由所長延聘之。

國語講習所は教育部の下部組織であり、所長、副所長一人ずつ、その他は事務員、書記等が数人いた。その事務員は教育部総長が任命することとなっているが<sup>(6)</sup>、教員の任命権は所長にあり、その場所は手帕胡同にあったが、この事は後述する。

では、細かく國語講習所について見ていく。

まず第一回のことは、胡適の「國語講習所同學録」<sup>(6)</sup>に、

今年(1920年、筆者注)四月、教育部召集各省有志研究國語的人、在北京辦了一個國語講習所。

と4月に開校とある。さらに《教育雜誌》「記事」(1920年3月20日第12卷第3号)では、

二月十八日、教育部令各省教育廳選派中學師範畢業生或小學教員、到京傳習國語。(～略～)茲就京師先行設立國語講習所、第一班定於本年四月一日開課。由各省區選派中學師範畢業生、或現任小學教員、入所講習。(～略～)就該省合格人員中選派三人、於開課前來京報到、(～略～)並可酌量加派數人、以廣造就而裕師資。

教育部が1月12日の通達の約一ヵ月後の2月18日に更に通達を出し、4月1日にまず北京に國語講習所を開設するとある<sup>(7)</sup>。教育部の行動はかなり迅速であるといえる。また1920年4月20日《教育雜誌》我一の「提倡國語的難關怎樣過渡呢」では、

現在教育部在京師設立國語講習所。四月一日開第一班。

と、ここでも4月1日に開校したとある。ところが1920年8月20日《教

育雑誌》「記事」には、

據國語講習所呈稱、敝所第一期甲乙組學員於四月三日開課

と、4月3日開校となっており、開校日は必ずしも一致していない。しかし第二回、第三回の開校日も1日であることを考えると、4月1日開校の可能性が高いが、断定はできない。

次に卒業時期はいつかを考えてみる。これは先ほど触れた1920年8月20日《教育雑誌》「記事」にある。

六月二十八日、教育部通咨檢送國語講習所第一期畢業學員名冊、文云、(～略～)至五月二十八日、修業期滿、即於二十九三十兩日分門考試。

5月28日授業終了、翌29日、30日に試験があり、6月28日に卒業名簿が出来上がった。

また、1920年3月20日《教育雑誌》「記事」の付記「國語講習所辦法」にも期間は〈二月〉とあり、概ね卒業時期は合致している。つまり、授業期間は4月1日から5月28日の約二ヶ月間という極めて短期間であった。

では次にどのような人間が、何人受講していたのか。これは先ほど言及した1920年3月20日《教育雑誌》「記事」の付記「國語講習所辦法」に、

資格 由各省區選派中學師範畢業或現任小學教員三人(務擇國文通順且口耳靈敏容易領會普通話者)

とあり、また1920年3月29日教育部批第一六五號の「國語講習所章程」では、

第五條 本所學員應就中學師範畢業生或現任小學教員由各省區選派三人但視地方需用情形得加派數人。

各省中学の卒業生か或は現役の小学教員の3人の派遣が認められていた。ただ一律に3人と決められていたのではなく、若干の増加は認められていた。わずかに二ヶ月間という短時間であったので、即戦力となりうる人材を求めたのだ。

では具体的には何人入學して、何人卒業したのか。これも先ほど触れた1920年8月20日《教育雑誌》「記事」にこのようにある。

據國語講習所呈稱、敝所第一期甲乙組學員於四月三日開課後、各省區報到官費自費學員、共計一百七十二人、至五月二十八日、修業期滿、即於二十九三十兩日分門考試、經各教員評定等第、除因曠課過多開除學籍者二人、因事未與考試者五人、成績過劣未能給予畢業證書者四人外、計及格學員范祥善等一百六十一人。

自費、官費合わせて172人が入學。その内、授業をさぼった者2人、試験を受けなかった者5人、成績が悪かった者4人、計11人が卒業できず、161人が合格した。

その卒業記念の写真が、1920年6月20日の《教育雜誌》に収められている。それには“中華民國九年教育部國語講習所第一期畢業攝影記念”と額が掲げられ、8列173人が写っている。卒業生が161人であるから、残り12人は教職員であろうか。

次に第二回國語講習所の開校日は、1920年4月22日の教育部「爲國語講習所第二班開課應派送師範學校國文教員入所講習文」に、

爲咨行事本部附設國語講習所第一班業經開課、茲定於六月一日續開第二班。查各省區師範學校爲造就師資機關現任國文教員講習國語、殊關重要應令每校派送一名、由校酌給公費。

とあり、また1920年5月20日《教育雜誌》「記事」によれば、

四月二十二日、教育部通咨國語講習所第二班開課。

文云、本部附設國語講習所第一班業經開課、茲定於六月一日續開第二班

と、第一回目の國語講習所開校の約一ヵ月後の4月22日には6月1日に第二回目の開校日を決定していた。

次に卒業時期であるが1921年7月出版の王璞『王璞的國語會話』<sup>(8)</sup>の「學員章句」(五)莫潤蕪には、

「國語講習所」何時畢業？聽說是七月底畢業。

とあり、また「學員章句」(九)陳與立にも、

第二期甚麼時候、可以畢業？聽說在這月底畢業。

とあり、7月下旬に卒業したことがわかる。

受講者については、1920年4月22日の教育部の通達や先に触れた『國語運動史綱』から、各省の師範學校から各一名が送られたことがわかる。

またその人数は『國語運動史綱』では、〈兩次畢業共計二百八十五人〉とあり、第一回の卒業生が161であるから、第二回の卒業生が124人であったことがわかる。<sup>(9)</sup>

第三回國語講習所の開講日は、1921年10月20日《教育雜誌》「記事」に、

九月二十四日、教育部訓令續辦第三屆國語講習所

と、9月24日に教育部から第三回目の開校の指示があり、その「記事」の付記「第三屆國語講習所辦法」には、

開課日期 十一月一日

と、1921年11月1日が開講日であるとわかる。受講者は『國語運動史綱』には、各省の大學、高師卒業の人間、或いは現役の教師であり、その卒業人数は101人とある。

またその受講資格は、「第三屆國語講習所辦法」では、

一、學員 男女生兼收其資格如左

(一)大學文科或高師畢業者

(二)師範本科或中學畢業而於國語略有研究者

(三)現任或曾任教員具有第一項或第二項同等之學力者

第二項第二句之解釋如下(曾識注音字母並能作國語文)

二、學員人數 共額一百二十人每省區考送三人約可得六七十人餘額在北京考取

三、修業期 三箇月

大學の文系、高師の卒業生、師範・中學の卒業生で國語の研究に従事している者、教員で上記の二項と同様の能力がある者となっており、かなり専門的な知識を持った者をさらに鍛えようとする意図が感じられる。

さらにその講習期間は3ヶ月と第一回より1ヶ月も多いことからその學習内容が多岐になったことが窺える。

その募集人員は120人とあり、6・70人は北京で選抜するとある。やは

り北京語をはじめから話せる北京の人間を重視したのであろう。

最後の第四回國語講習所の開校時期については、胡適の『國語文學史』の黎錦熙の代序には

那年(1922年、筆者注)十二月,教育部辦第四屆國語講習所

とあり、1922年12月に開校したことがわかる。

またその卒業人数は、『國語運動史綱』には、1922年に54人の卒業者を出したとあり、以前に比べると卒業人数が極端に減っている。しかしこれ以外の入学人数、応募資格はわからなかった。

そして黎錦熙の代序に

這第四屆也就是教育部最末屆的國語講習所了。

とあり、第四回目でこの講習所の役割を果たし終えたといえる。<sup>(10)</sup>

以上に第一回から第四回の國語講習所を見てきたが、表にまとめると次のようになる。

	開校日時	入學人数	卒業人数	募集対象
第一回國語講習所	1920年4月1/3日-5月28日。 翌29日、30日試験。	172人	161人	各省の中學、師範學校の卒業生 か現役の小學校教員
第二回國語講習所	1920年4月22日、教育部が第二回國語講習所開校の指示。 6月1日開校、閉校日7月下旬。	不明	124人	各省の師範學校の學生
第三回國語講習所	1921年11月1日開校。 閉校日は不明。 學期は3カ月程度。	募集人数は120人	101人	大學の文系、高師の卒業生、師範・中學の卒業生で國語の研究に従事している者、教員で上記の二項と同様の能力がある者
第四回國語講習所	1922年12月	不明	54人	不明

### 三. 授業の内容と教授陣

以上に開校日時、募集条件、入卒業者の人数などを見たが、次にどのような授業が、誰の手で爲されたのかを見ていくが、ここでは資料が多く残っている、第一回と第三回を中心に検討していく。

まず先ほども触れた1920年3月29日教育部批第一六五號の「國語講習所章程」と、1921年10月20日《教育雑誌》「第三屆國語講習所辦法」を見る。まず「國語講習所章程」では、

#### 第六條 本所教科目所左

- (一) 國音 1 注音字母 2 發音學通論 3 中國音韻沿革
- (二) 國語文法
- (三) 國語教授之研究 1 教科内容 2 教授方法
- (四) 國語練習 1 讀文 2 講演(分組) 3 作文(課餘作)
- (五) 言語學大意(臨時講演)<sup>(11)</sup>

とあり、次に「第三屆國語講習所辦法」では、

#### 四、課程(以十三週計)

注音字母	每週六時	共計七十八時
發音學		
注音字母另組課外練習	由注音字母教員主任指導	
國音沿革	每週二時	共計二十六時
會話	每週二時	共計二十六時
會話另組課外練習	由會話教員主任指導	
國語文法	每週四時	共計五十二時
國語文學	每週二時	共計二十六時
國語教授法	每週一時	共計十三時
言語學概論	每週一時	共計十三時

とあり、多くの科目が共通している。その共通している科目は、①注音字母(第一回目は國音の中の一つの科目)、②發音學(第一回目は發音學通論)、③國音沿革(第一回目は中國音韻沿革)、④國語文法、⑤國語教授法(第一回目は國語教授之研究)、⑥言語學概論(第一回目は言語學大意)である。それぞれ固有の科目は、第一回では⑦國語練習、第三回では⑧會話である。

では共通科目の最初から、その担当者と講義内容を見ていこう。

最初に当時の學生の証言を見ていく。王璞『王璞的國語會話』には、その当時の國語講習所の學生の文章が載っており、その中の林青という人物の文に以下のようなものがある。

「國語講習所」的校址，是在那兒，所長是那一位呢？

就在教育部後面，手帕胡同東口，正所長是張春霆先生，副所長是錢均夫先生。

學科是教授甚麼，教員共有幾位？

學科有講讀，作文，是胡適之先生擔任；會話是王蘊山先生擔任；國音學是汪一菴先生擔任；音韻沿革是錢玄同先生擔任；國語教授法是陳斐然先生擔任；還有國語文法各種，是沈朶山和黎邵西兩位先生分任。

教授的功課，一星期有多少時間，學員都是男的嗎？

功課一星期有二十二個鐘頭，我們同學有一百三十多位，裏頭有九位是女人家，還有幾十個旁聽生，也是男女都有。

國語講習所の所長は張春霆、副所長は錢均夫<sup>(12)</sup>で、1920年の教育部批第一六五號「國語講習所章程」の規定通りの二人である。

學科の担当として、講演、作文は胡適、會話は王璞、國音學は汪怡、音韻沿革は錢玄同、國語教授法は陳斐然、國語文法は沈朶山<sup>(13)</sup>と黎邵西とある。以下に詳しく見ていく。

### ①注音字母と②發音學

注音字母は1912年に成立した讀音統一會で議論されていたが、政局の不安定により、正式に公布されたのは1918年11月23日であった。この時初めて公式に漢字の音を表す記号が世に出て、翌年には、商務印書館から『國音字典』で出版された。そこでこの注音字母の習得が教師としては必須のものとなった。

では誰が注音字母を教える立場だったのか。汪怡『國語發音學』の錢玄同の序文には、

1920年四月、國語統一籌備會辦第一屆國語講習所，汪先生擔任講授國音，這部書便是他那時編的講義。三年以來，會中又續辦了第二、三、四屆的國語講習所，仍舊是汪先生擔任講授國音。

とあり、第一回から第四回まで汪怡が國音の担当者の一人であった。この汪怡という人物は、1877年生まれ、浙江省杭県出身。民國初期に國語制定の中心的な組織の讀音統一會、國語統一籌備會の會員であり、191

9年9月、商務印書館から出版された『國音字典』の校訂専員でもあった國音の専門家であった。

発音學の方も、同じく『國語發音學』の黎錦熙の序文に

在這三四年中間,我和汪一庵先生常常地是一塊兒出京,到各地去宣傳國語:他所擔任底講演是國語發音學;我所擔任的是國語文法和國語教學法。

と、(北京を出て各地を回り、國語發音學を講演していた)とあり、注音字母だけでなく、國語講習所で發音學も教授していたか、或は講演を行っていた可能性がある。

### ③國音沿革

これは林青の証言通り、錢玄同が担当していた。『錢玄同文集』第五卷(1999年、中國人民文學出版社)「國音沿革六講」の冒頭部分の説明には、

《國音沿革六講》爲作者1920年在國語講習所的授課講義,未正式出版過。

とあり、六課に分けて講義を行ったようだ。その内容は第一・古今音韻變遷總論、第二・聲、韻と反切、第三・現代の標準音—注音字母、第四・元明清三代の標準音、第五・魏晉から唐宋の標準音、第六・周朝の標準音と周から現代にいたる標準音の変遷を論じた授業であった。この講義の内容はかなり高度なものであり、ここからも生徒のレベルの高さがうかがい知れる。

ただ第一回目の國語講習所でも錢玄同が行っていたかは確認できない。

### ④國語文法と⑤國語教授法

林青の証言に依ると、國語文法は沈朶山と黎邵西、國語文法は陳斐然とあるが、これ以外の資料では確認できなかった。しかし先ほど触れた『國語發音學』の黎錦熙の序文には、(我所擔任的是國語文法和國語教學法)と、黎錦熙自身が各地で國語文法と國語教授法を教えていたとあるから、國語講習所でも同様に教えていたのであろう。

### ⑥言語學概論と⑦國語練習

これは現段階では内容、担当者共に不明である。

⑧會話

王璞『王璞的國語會話』の弁言に

一、此書是教育部所立「國語講習所」第一班的會話講義。

とあり、また王璞の『實用國語會話』にも

一、此書是教育部所立國語講習所第二班的會話講義。

と、第一回、第二回の會話の講義に使ったとあり、王璞が講義を行っていた。しかし第一回の「國語講習所辦法」には會話の科目が無い。これは會話の授業が全く無かったのではなく、國語練習の課目の中に會話が含まれており、それが第三回では、独立した形の科目に昇格したのではなかろうか。

王璞(1875 - 1929)は苑平出身、『官話合聲字母』の著作者・王照の門人。1902年、張百熙に字母の推進を上奏した。民國以後は、讀音統一會臨時主席(1913)、國語統一籌備會會員、注音字母傳修所所長(1916)を歴任。黎錦熙等と注音字母公布に尽力した國語の専門家であった。

⑨その他

さらに、林青の証言には講演、作文は胡適が担当していたとある。この〈作文〉が、一体どのようなもので、どのような形で胡適が参画していたのか、よくわからない。〈課餘作〉とあり、宿題を出してそれを添削していたのであろうか、疑問は残る。

最後に講演であるが、胡適は「國語文學史」を國語講習所で講演している。「白話文學史」の自序には

民國十年(1921年),教育部辦第三屆國語講習所,要我去講國語文學史。(～略～)同年(1922年、筆者注)十二月,教育部開第四屆國語講習所,我又講一次,即用南開油印作底子,另印一種油印本。

とあり、「國語文學史」を第三、四回の國語講習所で講演している。また1921年12月31日に國語講習所同學會で「國語運動與文學」の講演を行っている。しかしこれらは第三回と第四回で行われており、林青の聞いた講演とは異なる可能性が高い。

その他の講演としては、蔡元培が行ったと考えられる。民國9年6月2

5、26日の《晨報》には蔡元培の「國語傳習所的講演」が載っており、実際に演説を行ったのは、6月13日。この時“國語傳習所”というものはなく、恐らく國語講習所の誤りであろう。『蔡元培全集』第四卷(1997年、浙江教育出版社)には、「在國語講習所演説詞」の題で収録されている。

また『王璞的國語會話』『學員集句』(二)李秋潭で

蔡先生講演的,好不好呢?我聽著實在是好得很

とある。この(蔡先生)は恐らく蔡元培であろう。

以上に四回にわたる國語講習所についてみてきた。教育部はいち早く國音の中核を北京音と規定し、教員の養成を迅速に行った。

その中身は第一回から第三回までは100人前後の卒業者をだしているが、1922年12月の第四回目になると、今までの半分の50人程度までなり、以後開校されていないようである。1923年頃になると注音字母や『國音字典』の使用頻度があがり、もはやわざわざ中央で教員を養成し派遣する必要がなくなったのであろう。

またこの國語講習所の教員も当時一級の知識人である、胡適、錢玄同、汪怡、王璞、黎錦熙等が担当しており、当時の教育部が相当な力を入れて教員の養成、國語の統一を目指していたことがわかる。

しかし総勢440人の卒業生が出身地に帰郷した後、実際にどのような授業を行い、學生を教育していったかはよく分からない。それは今後の課題として残った。

また同じ頃、このような同様の組織、具体的には商務印書館の國語講習所、中華書局の國語專修學校といったものもあり、どの程度國語形成に寄与があったかも解明していきたい。

#### 注釈

- (1) 『國音字典』では、平上去入の区別はされていたが、実際どの地方の聲調に依るかは明示されていなかった。その結果、國音で話すが聲調はどこでもよい(國音無調)、國音で話し聲調は北京音(國音京調)、北京音で話し聲調も北京音(京音京調)など様々な意見が噴出した。最終的には1923年の國語統一籌備會第五回大会で京音京調が採用され、『國音字典』の大修正が加えられた。
- (2) この訓令は1920年12月24日に出たようであるが、原典は未見。今回引用した文章は、黎錦熙『國語運動史綱』「卷二 第三期(三)國語統一籌備會 (2)國音辞典」に掲載されているものを使用した。
- (3) 黎錦熙(1890-1978) 字は君劭、邵西等。湖南省湘潭県に生まれる。1907

年、北京鐵路專修科に入る。1918年國語統一籌備會幹事に就任。その後北京師範大學、北京女子師範大學の教授を歴任。新中國成立後は、中國文字改革協會、中國文字改革委員會など言語政策に長年携わった。

(4) 胡適「白話文學史」の自序や1921年10月20日《教育雜誌》「記事」等では第三回國語講習所の開講年は1921年とある。

(5) 教育部総長は1920年8月11日までは傅嶽秦、8月11日から范源濂。

(6) 胡適「國語講習所同學錄」は1921年2月《新教育》第三卷第一期掲載。

(7) 北京以外の何処に國語講習所があったかは不明。

(8) 『王璞的國語會話』「弁言」には、以下の記述がある。

一、此書是教育部所立「國語講習所」第一班的會話講義。

二、前幾課是鄙人編纂、後皆採取學員逐日造句集成的。

前半は第一回の會話の講義、後半の「學員集句」は第二回の學生の文章を集めたものである。

(9) 『王璞的國語會話』の「學員集句」は第二回の生徒の作った短文が名前と共に数多く収められている。その文章は同一名のものが若干含まれており、その人数は128人である。その氏名は、

蘇耀祖、李秋潭、彭獻廷、王肇業、莫潤鄉、章登元、易振鵬、張宗錫、陳興立、王德復、吳景賢、朱楚善、楊昭標、莫紹錦、魚金波、李景龍、曹鴻文、王傳、張俊民、吳炳烈、高殿卿、梁鴻忠、郭錫容、程守銘、朱鎮中、楊得春、杜寶恆、吳啓治、趙康濟、張希曾、童世衡、石庸俊、高世樾、孫振甲、林青、武思光、季光玠、鐘永年、周策勳、盧崇赫、陳昌、聶鴻藻、李華衰、陸秀、趙德潤、施淑儀、劉鴻勛、吳景勳、金樸清、劉敬臣、湯承榮、葛冰如、朱增離、葉其菁、孟延俊、羅延鋌、宗威、郭祖培、吳玉勳、唐若蘭、白鎮瀛、韓夢琦、陳德堃、馬協鳳、司心銘、王祖祐、陸亭林、張守度、樊金科、楊佑、曹迺嶽、陳振華、蕭軾儁、鄭文熙、李煦春、劉成毅、許孝先、鄔榮治、歐陽錫蕃、于毅、周木若、馬乘風、彭夢民、包祖懿、袁澤濬、張巽甫、許光世、李蔭黎、王蔭芬、曹福山、高應奎、龍汝鈞、薛競、穆文閣、包宗幹、程堯、葉松坡、高全瑞、高志、高世慎、劉東谷、王煥斗、王尚卓、童殿佐、陳東軒、王希曾、姜寶善、惠豐、張冶、傅定雲、方畚、唐敬修、稽覲、賴季允、譚元吉、廖景蘇、李華、周監、張守約、傅德成、鄧偉、戴杰、周靜、曹希忠、徐永澤、馬文憲、歐陽溱、王蔭芳。

(10) 第四回の國語講習所に関しては、宮越健太郎『華語發音提要』に言及箇所がある。一つは例言に「本書ハ予ガ嚮ニ在支那研究中國教育部第四屆國語講習所ニ於イテ汪怡王璞兩師ニ就キ実習セルモノヲ基礎トセリ特ニ茲ニ附記ス」とあり、もう一つは、V 四聲に、

王氏	陰平 (上平)	聲浪直而平	
	陽平 (下平)	聲浪高而揚	
	上聲	聲浪強而曲	
	去聲	聲浪遠而墜	
汪氏	(四聲)	(音度)	(音長)
	陰平 (上平)	聲浪直而平	長
	陽平 (下平)	先低後高 (低音較暫高音較久)	更長
	上聲	先低後高 (低音較久高音較暫)	更長

去聲                      先高後低                      長

とあり、汪怡は國音、王璞は會話を教える際に、四聲を教えていたことがわかる。また日本人である宮越も如何なる方法でかは不明だが講習所に通い、その成果を1926年という早い時期に最新の中國語を『華語發音提要』にまとめ、日本に紹介していた。

宮越健太郎(1885 - 1962) 新潟県高田の生まれ。1905年、東京外国語学校卒業。1918年同大學の教授に就任。その後四十年間その職にあった。『支那語の系統』『華語發音全表』等がある。

- (11) 1920年3月20日《教育雜誌》「記事」の「國語講習所辦法」と1920年3月29日教育部批第一六五號の「國語講習所章程」は若干異なる。「國語講習所辦法」は資格、期間、授業時間、課程から成るが、「國語講習所章程」は全十四条から成っている。「記事」によると2月18日に「國語講習所辦法」が出来上がっており、恐らくこれを基にして「國語講習所章程」を作成したのではないか。
- (12) 張春霆、錢均夫の詳細は不明。
- (13) 陳斐然、沈朶山の詳細は不明。

#### 参考文献

- 『國語運動史綱』黎錦熙著、商務印書館、中華民國二十九年二月三版。  
『胡適文集』歐陽哲生編、北京大學出版社、1998年11月第一版。  
『王璞的國語會話』王璞著、中華書局、民國二十四年六月第三十四版。  
『國語發音學』汪怡著、商務印書館、1924年4月。  
『錢玄同文集』錢玄同著、中國人民大學出版社、1999年7月第一版。  
『華語發音提要』宮越健太郎著、車前堂、大正十五年五月十日。  
《教育雜誌》臺灣商務印書館、1975年。  
『中国近代教育史料彙編』陳元暉主編、上海教育出版社、2006年4月。